

# ともに歩もう 石巻だより

伝えたい。過ぎ去った日々あの笑顔。  
暗闇に立ちすくんだ時、  
この記録が足元を照らす光となるように。  
そしてまた明日の朝を迎えられるように。  
朝日新聞社員がつづる。

## 子どもたち

あの日、帰らぬ旅に出た  
子どもたちの記憶を刻みます

中村香奈さん「9歳」

## 水色のドレスで微笑んで

草花に囲まれたホールで、清々しい水色のドレスをまとい、はにかんだように微笑む。額縁に入った色鉛筆画は、中村香奈さんが着飾った姿をていねいに描きだしている。

東日本大震災の後、遺影をもとに描いてもらった。

お洒落をするのが大好きだった。

父の次男さん、母のまゆみさんはその頃を思い出すと、顔がほころぶ。

石巻市尾崎。北上川河口近くの漁業の町が香奈さんの故郷だ。中村家は、地元の神社を管理し、祭りを司る「宮守」の家柄。年に一度の祭りの二日前に生まれた。初めての子どもだった。

誕生の報を聞き、病院へ行くこととする次男さんを地元の人が止めた。宮守の家の男が産婦人科に赴くのは、なにやら言い伝えでよくないことらしい。「説明されてもよく

分からなかった」と次男さん。我慢できずにこっそり病院へ行き、香奈さんと対面した。くせ毛が自分に似ている、と思った。

次男さんの父は病気で別の病院に入院していた。生まれたばかりの香奈さんを会わせるため、赤ちゃんかごに乗せて病院へ行った。4カ月後、父は亡くなった。

柱を亡くした一家にとって、香奈さんの誕生は「光」だった。

「何をすることも香奈が中心でした」とまゆみさんは言う。

食事の味付けは、大人たちではなく香奈さんの意見が一番だった。料理をするのも大好きで、トイレ掃除もいやがらない。母やおばあさんを喜んで手伝う。香奈さんを囲んで失敗しながらケーキ作りやパン作りを家族でやってみた。

きょうだいがいらないせいか、地域の子どもたちをかわいがった。



古い間取りの家は部屋が広く、何人もの子どもが駆け回って遊ぶことができる。歓声を聞きながら、床が抜けるのでは、と次男さんは心配になった。みんなが帰ると部屋じゅう

におもちゃが散らかり、遊びに来ていた子のおばあさんが謝りながら片付けに来たこともあった。

お祭りが大好きだった。

9月になると、祭りの準備に中村家は忙しい。部屋を掃除してお宮に幟を立てる。小学校に入る前から、香奈さんは大喜びで手伝った。参列者に配るため、お札の袋に餅を入れる。こねた餅を丸めるのも楽しげだった。

慣習により、女性は神事には参列できない。でも毎年、祭りの当日に届けられる魚を見ては、うれしそうにしていた。

次男さんは震災後、神事に参加することは、まだできないでいる。

## 明日の風

JR東京駅で始発の東北新幹線に乗る。古川駅で乗り換え、小牛田駅で石巻線のホームへ急ぐ。電光

掲示板を見上げる。行き先は「女川」。その2文字を人々はどんな思いで見つめるのだろう。万感がこみあげる▼あたたかな土の香りが立ちのぼってくるような田園の中、2両編成の列車は鉄路をたどる。住宅街をぬけ、万石浦を望む。浦宿駅に停車。いよいよ次の駅だ。陸橋を渡り、トンネルへ。光がぐんぐん大きくなり、出口。新しい砂利に敷かれたレールが現れた▼震災から4年後の2015年3月、浦宿―女川間がつながり、石巻線は全線復旧した。女川駅舎は新築だ。飛び立つ水鳥をイメージする。広げた両翼が屋根、のびした首がホーム▼駅周辺は高さ7メートル前後まで土を盛った。道路も標識も新品だ。一帯は13年夏から立ち入り禁止になっていた。私は駅を出て、13年夏のその日まで通った二画を探した。どこだったろう。新しい大地で私には見分けられな

大川小学校の3年生だった。級友たちと学校にいて津波に襲われた。見つけたのは3日後だった。

多くの人が行方不明になり、消防団の班長だった次男さんも尾崎に戻って、捜索活動に加わった。

家は残ってはいたものの、津波が流れ込み、家財道具も流された。

次男さんには探し出したいものがあつた。香奈さんが使っていたゲーム機「ニンテンドーDS」。デコレーション用の花柄シールをたくさん貼って大切にしていた。

何か形見になるものがほしかった。捜索に当たる自衛官にも打ち明けてみたが、どうしても見つからなかった。

## 猫の「ライ」

あるとき、次男さんはクローゼットの中の布団に点々と続く泥跡を見つける。小さな猫の足跡だった。間違いなく津波が過ぎた後についたものだ。

まさか——と思った。

香奈さんは、幼稚園のころから2匹の雌猫を飼っていた。大きいのは「ミルク」、小さい方は「ライ」。どちらも東松島市のまゆみさんの実家からもらい受け、名前は香奈さんがつけた。朝起きてえさをやるのは香奈さんの仕事。すっかりなついて、宿題をやっている「遊んでけろ」と言うようにすり寄ってきていた。

ほどなく次男さんは納屋の2階で

「ライ」を見つける。おびえきったように足元にすがりついて

離れなかった。

海沿いの尾崎は地震で地盤が下がり、そのころは船でなければたどり着けない場所だった。忘れ形見を連れて帰るため、かごに入れて船に乗せた。

そのまま飼いつづければよかったか、と今思う。しかし、仮設住宅では飼うわけにはいかず、東松島の実家へ戻さなければならなかった。一昨年ごろ、「ライ」は飼い主を追い求めるように姿が見えなくなったという。もう一匹の「ミルク」はついに見つからなかった。

「誰にも優しい子だった」と次男さんは言う。

尾崎の集落には10人の小学生がいたが、面倒見のいい香奈さんは誰からも慕われていた。震災で10人のうち9人が犠牲になった。

ささやかな思い出だが、二人には忘れられない言葉がある。

震災の少し前、3人で車に乗ってイオンモールに行くとき、香奈さんが言った。「私が免許をとってお母さんを乗せるよ」。まゆ

みさんは教習所に行っていたときに妊娠が分かり、免許をとらないままだった。思い出すと心が温まる。次男さんにはこう言っていた。「車は買ってよ」

## 今も家族の中心に

お洒落好きの香奈さんには夢があった。いつかアイドルになりたい、と。テレビアニメ「プリンセス プリキュア」のキャラクターにあこがれ、買ってもらった、青色のドレスで近所を出歩いた。

尾崎は、50軒ほどの民家とわずかな商店だけの小さな集落。人目をひく姿は近所で評判になり、孫が同じドレスをほしがってと訪ねて来るおばあさんもいた。

「ドレスを着て家族で写真を撮りたい」と言っていた。もう少し大きくなってから、と応えたことを次男さんは悔やむ。

その代わりが「絵」だった。

描いてもらったのは3枚。一枚は水色のドレス、一枚は紫色のドレスに紫の帽子、そしてもう一枚は家族3人が並んでいる。正装した次男さんとまゆみさんの隣に、ブレザーとチェック柄スカートの香奈さんがいる。壁にかかった3枚の絵のなかで、香奈さんは家族に微笑みかける。

いまは郊外の仮設住宅で、次男さんとまゆみさん、次男さんの母と兄の4人で暮らす。食事時には、テーブルには香奈さんのカップを置いて、水やお茶を入れるのが常だ。

震災から4年がたった今も、香奈さんは前と同じように5人家族の中心にいる。

かった▼立ち入りが禁じられる日まで、そこでは小さな鯉のぼりが風にゆれていた。あの日から帰って来ない3歳の子のために、母親が置いたものだ。そばには、いつも花があつた▼私は、母親に取材中、坊やの名前を尋ねたことがある。「書かないで」。短い返事思いが詰まっていた▼坊やの祖母にも教わつた。一度、祖母が孫の名を口にした瞬間、母親は唇に指をあてた。言わないで。そう伝える仕事だ▼坊やは父親と一緒だった。2人の葬儀は終えたが、写真は置かない。写真を目にすれば、名前を耳にすれば、崩れてしまうのだろう……。母親が笑顔の奥に押し込めている涙を思う▼13年春、祖母は、坊やが暮らした一画を歩き、1輪の黄色い水仙の花を見つけた。持ち帰って大事に育てた。この春もまた、いくつもの小さな花を咲かせた▼大地に私は立つ。海風が吹く。「あすこの田はねごと宮沢賢治の詩を念じる。……雲からも風からも透明な力がそのこどもにうつれ……」。天を仰ぎ、風の中、祈る。



# 雄勝巡礼

石巻市雄勝町の港そばの  
雄勝病院の話から始めよう。

[第7回]

## たてに二重三重ぶれて見えた新館

春まだ遠く冬の寒さが残っていた、あの時……。病院にいた職員28人のうち24人と、入院患者40人全員が、犠牲になった。

職員4人が救助された。2人は本館屋上で、2人は新館屋上で流された。今回は、その4人のうち、事務職員の男性の証言から、当時を記録する。

ここでは彼をAさんと呼ぶ。当時は45歳だった。

2011年3月11日の午後2時46分。激震が発生。石巻市の沿岸部は震度6弱だった。

本館1階の事務室で、Aさんは机にしがみついた。もぐることはできない。しがみついただけでせいじっぱいだった。

ゆれがおさまりかけた。

ころばないよう、中腰で廊下に出る。左手の玄関から外へ。本館と新館はL字形に並んで立つ。どちらも鉄筋コンクリートの3階建てだ。

視界に入った新館は、たてに二重三重にぶれて見えた。

大地が、たてにゆれていたの

だ。建物の音なのか、大地のうなりか、ゴオオオ……と鳴る。

立っていたか、すわっていたか、記憶にない。長かったことは、記憶に残っている。

気象庁の記録によると、震度4以上のゆれが約190秒つづいた沿岸部もあった。

ふだんは陽気でにぎやかな同僚、牧野まり子さん(当時40)が真剣な声で言った。

「写真、とったほうがいいよね」

「んだな」。Aさんは、書類の散乱した事務室でコンパクトカメラを探し出し、再び外へ。

玄関下の基礎がコンクリート

## 薬剤部長「ごめんなさいね」何度も

病院前の県道を約400メートル西へ。旧町役場、石巻市の雄勝総合支所がある。敷地は病院より若干高い。Aさんと薬剤部長の山田朗さん(当時57)は、職員たちの車を支所の駐車場へ移す。混み合っていた。

2人は歩いて戻る。

からはがれたように浮いているのをカメラに収める。

地震で牡鹿半島一帯の地盤が1メートル前後沈下したことは、この時、知る由もない。

その頃だ。主任栄養士の佐々木弘江さん(当時42)とすれちがった。

「行ってくるから」

佐々木さんはそう言い残して出ていった。

長男を保育所へ迎えに行くのだと察した。震度4以上の地震の場合、保護者が迎えに行く決まりになっていた。

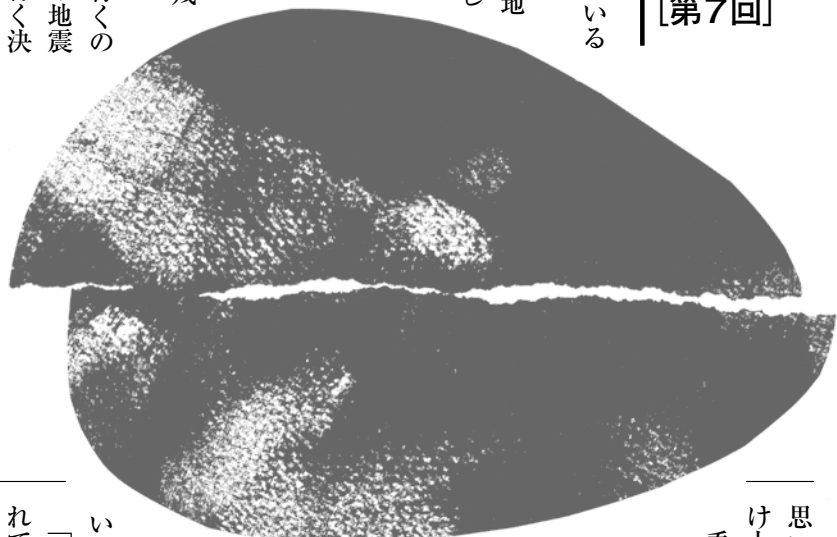
Aさんは、カメラを手に、本館の各階を歩いた。損傷は目につかない。

県道沿いの防潮堤がささぎつて、海は見えない。

「なんだ、この水は」

山田さんが言った。側溝から水があふれでていた。

「さっきの地震で水道管が破裂したんじゃないですか」と答える間にも、ゆっくりと速度を



思いながら、Aさんは3階へ駆け上がった。

看護師たちの声が飛び交う。病室から外を見た。(1階が水没すつべなあ。パソコンは終わりだな。ああ、どうすつかなあ)と思ったが、3階に達するとは、その時も予想しなかった。

「誰か運ばなくていいですか」と、看護部長の末永三和子さん(当時59)に声がかかった。

「このひと」

個室の患者だった。点滴の棒が近くににあった。Aさんは、何をどうしていいか、わからない。

「そっち、持って」。そう言われて初めて、シートごと抱え上げるのだと理解した。

シーツの四隅をAさんと山田さん、臨床検査技師長の石井達也さん(当時58)、主任放射線技師の片倉満さん(当時41)がそれぞれ抱え上げる。

Aさんは枕側を持つ。重い。意外な重さだ。お年寄りの女性だったと思う。

「どこまで連れて行くんだべ」

1度だけ、そう問われた。誰も答えない。答える余裕はない。3階の階段から見た階下に、まだ水は来っていない。

女川町議会 福島を視察⑦

## 災害公営住宅は 「我々はできず県営で」

女川町議会は2014年7月、福島県浪江町を訪ねた。福島第一原発事故の被災地の視察だ。今も全町避難が続く。原発は町の南隣、双葉町と大熊町に立っていた。

女川町議たちは次に約100キロ内陸の会津若松市へ。大熊町の出張所を訪れた。大熊町議らの説明を受け、質問する。女川町議の酒井孝正氏(68)は、災害公営住宅の建設をどこが担うか尋ねた。

返事はこうだった。「自分の地域に建てるのが基本。我々は出来ない。よそに頼んで建てることになる。おおむね県営です」。大熊町も全町避難中。町内ならば町営住宅の建設が可能だが、現状は町外で建てるしかなく、大半を県営で託す。

放射能汚染を除く作業も、技術的困難に直面し、当初予定より遅れている。

事故の現実には酒井氏の思いは強まる。

「想定外」の言葉は死語になった。大地震も大津波も起こることを前提に、安全対策に取り組まなければならない」

課題は山積だ。避難計画は机上の空論では済まされない。女川町から石巻市へ出る道は国道1本だ。昼夜を問わず救援に駆けつけられるのはどこか。避難だけではない。使用済み核燃料はどうする。住民が議論するにも原子力用語は難解だ。専門家でも意見が異なるものを素人はどう判断したらいいのか……。

東北電力は女川原発の再稼働をめざす。これをどう考えるか。酒井氏は福島を除く原発立地町で女川が唯一、復興途上にあることを指摘する。「ふつうに考えられない状態にありますよね」

約9割の家屋が被災し、827人が津波の犠牲になった町だ。

復興にかかる莫大な費用。町予算は震災前の約10倍に膨らむ。国の交付金が頼みの綱だ。それは今後も続くのか。

計画では復興完了まであと4年。「遅れることはあっても、早まることはない」と覚悟する。その間、さらに年を重ねる高齢者、生活弱者への一層の支援も迫られる。

これまでは、原発があったからこそ、様々な町独自の支援も出来た。

「再稼働しないで、住民サービスをどう継続していくの。人口減少にどう対応するの。産業はどうするの。この町をどうするの」。問いが次々に出てくる。

山田さんは、屋上へ出る扉の前で、患者を下ろすように指示した。

患者は何か言ったかもしれないが、バリバリと窓ガラスが割れる音で聞こえなかった。

Aさんは屋上に出て、外を見た。2階も水没しそうな勢いだ。

(3階もやばいな)と感じ、山田さんに「さっきの患者さんどうしますか」と判断を仰いだ。

山田さんは、即座に搬送を決め、動く。

枕側を持つのは山田さんと、主任栄養士の佐々木さんだ。

長男の保育所から戻って来ていた。誰かに何か言われた訳でもなく、自ら枕側に控え、身長145センチの体をみなぎらせて患者を抱き上げる。

足元を持つのはAさん1人だ。

重みで患者が落ちかける。

すぐに察知した山田さんが、傍らにいた歯科部長の須藤伸毅さん(当時49)を一喝する。

「持てっ、この」

ぼうぜんと立ち尽くしていた須藤さんは、ハッと我に返り、手を差し出した。

周囲は悲鳴に似た声が飛び交っていた。

屋上の中央に運び出す。

だが、行き場はない。うろろろするうちに足元に水が流れ込む。

山田さんが皆に目で合図し、ぬれた足元に患者を下ろした。

「ごめんなさいね、ごめんなさいね……」

下ろしながら患者にわびる山田さんの声は、今もAさんの耳に残っている。

そこは、病院を示す緑色の十字の印がついた給水塔の下。

Aさんは、塔の壁にへばりつくが、数分ともたずに押し流さ

## 308号室の患者そばに看護部長

もうひとつ、Aさんの脳裏に刻まれた光景がある。

屋上か、3階か、場所はさだかでないが、すぐ横で、看護部長の末永さんの声があった。

「もう少しなのになあ」。さけび声ではない。「なんでだべなあ」と心の底からしぼり出すような悲痛な声だった。

右隣の末永さんを見た。今にも泣き出しそうな横顔があった。

その後――。

本館3階の個室、308号室で、末永さんは見つかった。

白衣姿だった。ゴム手袋も着

れた。

その瞬間、水のあまりの冷たさに、思わず、「助けてー」とさげんだことを覚えている。

開いていた。点滴の針をあつかう時に着ける手袋だ。

点滴の針をぬいて屋上へ。そして階段を下り、配膳室を過ぎて、4部屋目の308号室。その部屋の入院患者、阿部正さん(当時83)のそばにいた。

阿部さんは、末期がんだった。阿部さんの娘は、父が最後まで

として、雄勝病院を選んだ。働きの父だった。優しい父

だった。がんが転移し、痛みがあっても、それを口に出さない

我慢強い父だった。娘は毎日、

昼と夕方、自宅から車で約25分の道のりを見舞いに通った。末永さんはいつも明るく話しかけてくれた。アハハと大きく笑う。娘には頼もしかった。歩けなくなった父のために娘が用意したウォッシュレットつきのポータブルトイレを「王様の便器」と呼んでくれた。父はモルヒネをのんで痛みを抑えていた。末永さんは副作用の便秘を気遣い、足しげく病室に通った。父が一人きりの時は話し相手にもなってくれた。父は娘に自慢げに語っていた。「婦長やあ、俺のウンチ、うんと喜ぶんだ。『出た出た』ってみんな呼ぶんだ。自ら投げさ(捨てに)行く時あんだ」

雄勝病院で父が過ごした穏やかな日々を、娘は忘れない。